

## 21 鬼子の誕生と怪異——日本古代を中心として

小山 聡子

二松学舎大学文学部

日本古代では、形態異常で誕生した子どもを鬼子（または異児、異子、奇児など）と呼んだ。とりわけ、はなはだしい形態異常（頭が2つ、手が4本など）があったり、生まれつき歯が生えていたり、異常に体が大きかったりした場合にこのように呼ばれ、多くは誕生後すぐに河原や大路に捨てられていた。

鬼子に関する先行研究の多くは、民俗学や文学を専門とする研究者によるものであり、古記録や歴史書に基づく研究は本格的には行われていない。しかし、鬼子については、古記録や歴史書にも様々に記録されており、鬼子を研究するにあたり、歴史学の面からこれらの分析をすることには、歴史の中の障害や障害児に関する研究を進展させることができる点において、大きな意義があると考えられる。

鬼子を含めた障害者に関するこれまでの研究では、特に体の外部に現れた病（障害）に関して、先天的なもののみならず後天的なものも含め、仏教の業罰、仏罰によるものと判断された、と指摘されてきた。たしかに、たとえば『法華経』には、法華経を謗る者は歯が抜け落ちたり忌まわしい唇を持ったり手足が逆になったりするだろう、と説かれている。『法華経』をはじめとする経典の記述に基づき、障害の理由が宿業などと結びつけられ解釈されてきた。ただし、外部に現れた障害にも様々な種類及び重篤度の障害があり、その別によっては、業罰ではなく別の解釈をされたものも多くあると考えられる。

実は、古代の古記録や歴史書をひもといて見ると、鬼子の誕生の理由について、宿業や仏罰という個人の言動によるものだと見なすのではなく、怪異という国家的問題として捉える考え方があったことが明らかである。つまり、何らかの悪事が起こる前兆として認識されていたのである。鬼子の誕生が怪異として認識されるようになった理由には、中国の思想の影響があると考えられる。

そこで本発表では、まず、中国の『漢書』「五行志」や『後漢書』「五行志」、『搜神記』などに記録された事例について検討していく。これらの史料には、人間や動物の形態異常に関する記事を多数確認できる。形態異常の人間や動物が誕生する理由については、董仲舒の天人相関説に基づき解釈されていた。天人相関説とは、天と人との行ないが連動し、為政者である皇帝の失政を戒めるために、天が災害や怪異を起こすという考え方である。

中国の天人相関説に関して、王の失政を戒める天については日本では定着せず、神の祟りとそれを認定する卜占のシステムが古代の怪異認識の形成に影響を与えた。本発表では、このような中国における事例を踏まえた上で、日本の古代における鬼子と怪異の関係について、具体的な史料を提示しながら検討していくことにしたい。

以上のように、本発表では、中国古代の史料において形態異常の子どもの誕生がどのように記録されているかを分析した上で、日本の古代の形態異常の子どもの扱いに与えた影響を指摘する。その上で、日本古代において、古記録や歴史書に記録された事柄を中心に、形態異常の子どもの誕生が怪異として扱われ、個人の問題ではなく、国家的な問題として取り上げられたことを明らかにしたい。形態異常の子どもの誕生は、仏教思想に基づく解釈のみならず、中国の思想に基づいた解釈もなされていたのである。